2020

LA NOUVELLE

No.24
PRINTEMPS

東京外語仏友会
〒 113-0033 東京都文京区本郷 2-14-10
本郷サテライト 東京外語会気付
発行責任者　藤倉洋一（1970/ 昭 45）
2020.4.1 発行

第 25 回サロン仏友会

去る 11 月 24 日（日）恒例のサロン仏友会が本郷サテライトで開催され、56 名の出席者で賑わった。今回の講師は昭和 47 年卒の吉竹純氏で、演題は「天皇陛下にお会いするまで―あるコピーライターの軌跡―」。卒業後就職された電通で言葉の技を磨き、数々の商品コピーを世に出すかたわら、新聞歌壇に多くの俳句や短歌を投稿してこられた。この日の講演の内容は、吉竹氏自身による次の記事を参照されたい。

講演の後は、お楽しみのボジョレ・ヌヴォの時間。豪華なオードブルと、例年より更に上質のヴィラージュ・ヌヴォ特選品を味わうことができ、5 名の初参加の方にも大いに喜んでいただけたことと思う。いつものように、最後の後片付けも大勢の皆さんにお手伝いいただき、無事に終了することができた。この場を借りて御礼申し上げます。

（幹事 中村日出男記）

講師を囲んで、ボジョレ・ヌヴォを味わう懇親会

あるコピーライターの軌跡

吉竹　純（1972/ 昭 47）

同窓会名簿に、吉竹は 4 人。1908 年英語科卒の吉竹慎一郎は、祖父。1967 年英米科卒の吉竹 (山元) 圭子は、兄の配偶者。そして私。占拠率 75% だ。父も九大で英語を教えていたので、外語に来るのは運命だったか。1968 年、一浪のあと、英語ではなくフランス語科へ。東大の弥生門から 1 分ほどのところに下宿し、朝な夕な生協食堂にお世話になった。

入学して、朝倉先生のクレディフのクラスに。フランス語を音から浴びる日々が始まったものの、夏休み明けに全学スト突入。アテネ、日仏をさまよう。ウロツキストを自称し、神田、新宿など衝突の現場に目撃者として出没した。今回、資料を探しているうちに、1969 年 2 月、大学当局の機動隊導入の動きに反対するフランス科教官の声明を発見。ガリ版刷りのビラにはなつかしい名前がならび、毅然とした態度はいまでも胸にひびく。

語劇もゼミも知らぬまま、1972 年、卒業。卒論は、「ル・クレジオ研究」。岩崎先生から、手を入れれば文芸誌『海』に紹介してあげると言われたが、すでに電通に就職していたので、断念。大塚駅近くで、何度かお昼をご一緒しながら、いろいろお話をした。

電通にはコピーライターとして入社。一般の試験のほかに適性テストがあり、受けてみたら合格した。仕事でフランス語を使う機会はなかったが、「カミュ」というコニャックのコピーを担当したのは、偶然ではなかったかもしれない。ピアニストの安川加寿子、画家の橋本明治など、著名人を起用し、商品の推薦コピーをゴーストライターとして書いた。作家の小川国夫に依頼したときは、藤枝の自宅まで伺って、ふたりでコピーを考えた。

クライアントは、東芝、日本石油、三井物産、住友信託銀行など、硬派が多かった。銀行はバブル期だったので、毎週毎週、新しい原稿をつくった。余りに忙しくて自宅にファクスを入れ、深夜にタクシーで帰宅し、仮眠ののち、原稿案をチェックするという生活。利回りが 9% を超え、50 万円が 5 年でおよそ 70 万円 (税抜き) になるという時代だった。

1987 年、資生堂やサントリーなど、日ごろから目立つ広告をつくっているクライアントが常連の朝日広告賞を、ミノルタカメラで受賞。誰もがフェイク！と思った。スローガンは、Yes,We Can.　オバマ氏に先んずること 20 年であった。

このころ、マイホーム建設を思い立ち、頭金として賞金 1000 万円のミステリー大賞を狙う。1989 年、新潮社の「日本推理サスペンス大賞」の最終候補作に残る。ところが、同じ候補に、宮部みゆき、高村薫、ほか一名。あえなく落選するも、年末ジャンボで 100 万円、次の年のサマージャンボで 200 万円。神はいると思った。

神を信じ (？)、2000 年 3 月をもって、電通を早期退職。ミステリー小説を書きあげ、意気揚々と応募したが予選にも残らず。語彙をふやすため俳句をつくり、退職まえから朝日俳壇に投句していたが、失意のなかで詠んだ一句に季語がないことに気づき、急遽、朝日歌壇へ送ったところ、入選歌の最後にすがりつくように載っていた。

なにものにかならむと二十世紀なにものにもなれず二十一世紀

そうか、短歌という道もあるのか。以来、新聞各紙へ投稿を開始。毎日歌壇では、選者の河野裕子さんから電話をいただき、面白いように入選し、2002 年、会社を辞めるときには想像もしなかった歌壇賞を受賞した。東京・白金の庭園美術館を訪ねた際の感慨である。

春のひる美術館裏人気なく青空のみがわあっと広がる

短歌と並行してつづけていた俳句では、2008 年、読売俳壇の小澤實選で年間賞。

すろうりい歌会始すろうりい

そして、2011 年 1 月、ほんとうに歌会始に入選。冬晴れのすがすがしい一日、皇居に参内し、正殿「松の間」で、小澤選の俳句の雰囲気のまま披講された。お題は、「葉」。式のあと、当時の天皇、皇后両陛下に拝謁。歌を詠んだ背景など、お言葉をかけてくださった。

背丈より百葉箱の高きころ四季は静かに人と巡りき

2 か月後、東日本大震災が起きた。自然と人間の黙契は、終わりを告げた。

講演の数日まえ、西ヶ原の外語大跡を訪れた。グラウンドは防災公園となり、要塞のようなマンションが無言でならんでいた。公園を出てゆるやかにカーブする坂を上っていくと、思い出がつぎつぎあらわれてきた。この勾配、この湾曲の具合。やあ、佐々木君。どこへ行くんだ。相場君、もう逝くなんて、早いじゃないか。坂道だけが、私を半世紀前に連れ戻してくれた。

（著書／『投歌選集　過去未来』(河出書房新社)『日曜歌集たび』(港の人)『日曜俳句入門』(岩波新書)　記事／朝日新聞「ひと」(2020 年 3 月掲載予定)）

≪「第 25 回仏友会総会」延期のお知らせ≫

恒例の「第 25 回仏友会総会」は 4 月 26 日（日）の開催を予定しておりましたが、今般の新型コロナウイルス感染拡大の状況を踏まえ、11 月 22 日（日）に延期し、第 26 回サロン仏友会も併せ大手町サンケイプラザで開催することにしました。詳細は改めて 10 月にご連絡します。ご理解のほどお願い申し上げます（会計報告（案）は次面掲載）。

私の教員生活 ―生徒、学生への感謝―

土居　守（1978/ 昭 53）

私は教員生活前半を高校で英語を教え、後半を大学でフランス語を中心に教えてきましたが、最後の方はフランス語以外の人文系の科目の方がずっと多くなりました。最初に勤務した都立町田高校全日制の 10 年間は生徒に恵まれ、非常に楽しいものでした。特にある数年間で担当した生徒たちは勉強の面でも人間性の面でもたいへん優れた人たちでした。その後、予想したとおり、彼らに匹敵するような生徒たち学生たちと付き合うことはありませんでした。なおその優れた生徒たちの一人が外語大の仏語科に進学し、約 30 年を経て仏友会で再会したことは大きな喜びでした。次に私は定時制高校に移動したのを機に、昼間は大学院に籍をおき、約 10 年をかけて博士論文「ドレフュス事件とアナトール・フランス―全体主義への批判―」を完成することができました。

その後大学に移り、2 校目のそして最後の大学が水戸市の常磐大学でしたが、ここで初めて語学以外の人文系の科目および卒論指導を担当し、これが大きな転機になりました。最初に担当した人文系の科目は異文化コミュニケーション、地域研究（欧州）、ユネスコ世界遺産、観光産業論などでした。授業の準備をするとき、たとえば異文化コミュニケーション概論というようなテキストを要約して説明しても面白くない。それも必要ですが、それだけでは不充分。何か基盤になるもの、それもすべての科目にわたって基盤になるものはないか。それは哲学だと思い、岩波のプラトン全集、アリストテレス全集をノートを取りながら読み通しました。そしてノートに取ったプラトンやアリストテレスの言葉は、予想したとおりさまざまな授業の基盤として役立ちました。特にアリストテレスの「文体の理想的なあり方は、明確であってしかも平板ではないこと」という言葉は印象深いものでした。アリストテレスはこの言葉を語の使用に関して述べているのですが、私はこの言葉を「高度の内容を明確に語る」と拡大解釈しました。これは難しいことですが、私は概論的な平易な（明確な）文章のなかにキーセンテンスを導入することで、全体が平板になることを避ける方法を取りました。たとえば、観光産業論やユネスコ世界遺産のなかで祭りを取り上げるときに、プラトンの「祭りはまず神々のためであるが、人々の親交のためであり、青年男女の結婚のためでもある」という言葉を紹介しました。この言葉からさらに多くのことが言え、授業が平板ではなくなると思いました。この方法は卒論指導ではさらに有効でした。土居ゼミの学生の卒論テーマは次のように実にさまざまなものでした。フランシスコ・ザビエル論、仏教伝来の道、ソクラテスの哲学、ギリシャ神話のヘルメス論、日本人はなぜ無宗教と言われるか、エロス論、魔女論、バレエ作品「ジゼル」、ガラパゴスとは、などなど。エロス論であれば、エロス概論のあとプラトンの「饗宴」について書くことを勧めました。これで全体が平板ではなくなり、性愛から哲学への愛が連続していることを知れば、これからの生活においてある示唆を得ることになるでしょう。魔女論では、概論のあとにユングの無意識における元型、特にそのなかの「影」について書くことを勧めました。自己の否定すべき「影」を相手に投影し相手を憎悪する。反ユダヤ主義にせよ魔女狩りにせよ、そのようなメカニズムが働いていることが理解できたようです。自己反省につながります。ガラパゴスのような自然を扱う場合には自然観の変遷（自ら生成する生きた自然から、神によってつくられた自然、人間がつくり変えた自然へ）に注目すべきです。環境問題を考えるうえで有効だと思います。

英語教師として教員生活をスタートさせた都立町田高校の生徒たちは、勉強の面でも人間性の面でも優れた人たちで、私は彼らから良い刺激を受けました。フランス語担当というよりも人文系の科目担当およびゼミ（卒論指導）担当となった常磐大学の学生たちはごく平均的な学生でしたが、私は彼らに講義するためや卒論指導をするために彼らと一緒に勉強し、その勉強（哲学中心）は退職後も継続しています。教員生活の最初と最後によき生徒たち学生たちに恵まれ、私は彼らに感謝しています。

フランス語劇を鑑賞して

花輪宗命（1971 / 昭 46）

仏友会では、外語祭の一環として上演されるフランス語劇を鑑賞・応援してきています。私も、以前からこの観劇を希望していましたが、藤倉会長からお声をかけていただき、昨年 11 月 23 日に念願がかないました。

今回の演目は、Les Demoiselles de Rochefort「ロシュフォールの恋人たち」でした。この劇のもとになっているのは、1967 年にヌーヴェル・ヴァーグの巨匠ジャック・ドゥミが監督したフランスのミュージカル映画です。1964 年に公開され、第 17 回カンヌ国際映画祭でパルム・ドールを受賞した「シェルブールの雨傘」（ちなみに、これは 2018 年度のフランス語劇で演じられました）で音楽を担当したミシェル・ルグランと再びタッグを組んで制作されたものです。

私は、生のフランス語を勉強するために、この映画を見に何度も映画館に足を運んだ記憶があり、非常に懐かしく感じていました。しかし、近年は生のフランス語と触れ合う機会がとんと途絶えていたので、果たしてどの程度理解し、エンジョイできるか、内心一抹の不安を抱えながら、会場のプロメテウス・ホールに向かいました。

当日は、あいにくの天候にもかかわらず、開演の 30 分前から観客が詰めかけ、ホールは期待と応援の熱気に包まれていました。公演が始まると、衝撃的な場面が眼前に展開しました。まず、私たちの後輩の皆さんが、フランス語だけでなく、歌に、演技に、ダンスに、相当なレベルに達していることでした。次に、驚いたことに、出演者の大多数が女子学生で占められていることでした。（次面に続く）

右から羽成萌々野さん、前川実花さん、山下皓也語劇代表、藤倉会長

≪ジュネーブ便り≫

ジュネーブのフランス語

リュエグ（井上）春菜（2000/ 平 12）

大学卒業後、東京で 5 年間フランス系の化粧品会社に勤め、その後主人の転勤に伴いロンドン、シンガポール、パリと転々とし、7 年前からスイスのジュネーブに住んでいます。近所の公園で知り合ったママ友に「フランス語を教えてほしい」と依頼されたのがきっかけで、子連れで通えるフランス語教室を開いています。幼稚園の登録に付き添ったり、デートのお誘いを断るメールの文章を一緒に考えたり（!!）、小児科に電話してアポをとってあげたり、ワインカーヴを巡りお酒を飲んだり…毎日のレッスン以外の色々な出来事も楽しいことばかりです。そして、スイスでも、駐在員の配偶者ビザ更新に A1 レベル（ヨーロッパ言語共通参照枠）のフランス語が必要になり、教える私も責任重大で、生徒の皆さんと一緒に頑張っている毎日です。

さて、今回「ジュネーブ便り」執筆のお話を頂き、読者は全員フランス語学科卒業生なので、私が気付いた標準フランス語とジュネーブで使われているフランス語の語彙の違いを書いてみようと思います。

スイスは人口 842 万人、公用語はドイツ語、フランス語、イタリア語、ロマンシュ語の 4 つ。その中で、フランス語を主要言語とするのは 23％です（出典 OFS ＝ Office Fédéral de la statistique、2019 年）。ジュネーブに住み始めた頃、初めて耳にする語彙に非常に驚きました。外語大やソルボンヌ語学講座などでは学んだことがない語彙や表現だったのでカルチャーショックでした。

例えば､数字の 70「soixante-dix」と 90「quatre-vingt-dix」を、ジュネーブでは「septante」と「nonante」と数えます。標準フランス語の数式（70=60+10、90=4x20+10）は慣れるまで私も苦労しましたが、「septante」は数字 7（sept）に 10 の位を作る ante を付けているので、単純で覚えやすいし、「nonante」も数字の 9（neuf）に似ているので､わかりやすいです。ジュネーブの現地校だけでなく、語学学校でもこの数え方で教えているし、DELF（デルフ・フランス語学力資格試験）の面接試験でさえも、試験官は「septante」､「nonante」を使います。ちなみに、ジュネーブでは 80 をフランス同様「quatre-vingts」と言いますが､隣のヴォー州にあるローザンヌでは「huitante」と言います。また、20「vingt」も、ジュネーブでは最後の子音 t を発音することが多いです。バスのアナウンスで、「correspondance, ligne 20...（バス 20 番へのお乗り換えは、こちらです）も t を発音しています。

カフェオレの呼び方も違い、ジュネーブでは「renversé」と呼びます。renversé は「逆さまの」という形容詞で、フランスではカフェオレを作るときに先にコーヒーを入れてから牛乳を入れるのですが、ジュネーブでは順序が逆だからこのような名前なのだと近所のカフェのフランス出身のウェイターが教えてくれました。「café renversé」（逆さまのコーヒー）ということです。なお、逆なのはコーヒーと牛乳の割合だ、との説もあります。

「Bonne journée !」（良い一日を！）の返答に、ジュネーブでは「Pareillement !」（同様に！）をよく聞くが､フランスでは､「À vous aussi」が多いですよね。また、「Service !」（どういたしまして）は店員や案内係などがお礼に対し答えるときに使う表現で、ジュネーブでは毎日聞く表現です。（しかも笑顔で答えてくれる！）「À votre service !」のことですが、フランスでは、あまり聞いた記憶がないのは、サービスが悪くてお礼を言う機会が少ないからでしょうか？フランスでは「Je vous en prie.」が一般的だと思います。テイクアウトのことは、「à emporter」ではなく「à l'emporter」、くしゃみをすると、「À vos/tes souhaits !」ではなく「Santé !」と言ってくれます。

ドイツ語起源のフランス語を見るのもジュネーブならではで、例えば、スーパーでは promotion の代わりに action（特売）と書いてあります。携帯電話のことをジュネーブでは「Natel」と呼ぶ人が多いですが、これは、40 年前、スイスで自動車用に携帯電話を開発するときに使い始めたドイツ語起源の言葉だそうです。

メールの最後の結びの句は、定型で「Meilleures salutations」（敬具）と書いてあります。フランスでは「cordialement」が多いと思います。時々を「parfois」ではなく「des fois」と言う人が多いですが、これはアカデミー・フランセーズも間違った語法だと指摘しています。

高校は「lycée」ではなく「collège」。タオルは「serviette」ではなく「linge」、学校に持っていく宿題や配布物を入れるフォルダーは「fourre」。命令形の後に「seulement」を足すと「どうぞ」のような意味になります。例えば「Entrez seulement !」（どうぞお入りください）のように。例を挙げるときりがありません。

当初はジュネーブフランス語に逐一ツッコミを入れていた私も、ジュネーブ生活 8 年目に入り、積極的にジュネーブ風フランス語を使っています。郷に入れば郷に従えですから。

仏友会会計報告（案）

（2019 年 4 月 1 日～2020 年 3 月 31 日、単位：円）

収　入		支　出	
前年度繰越金（＊1）	875,991		
総会会費	290,000	総会費用	337,019
受取通信費	193,000	「LA NOUVELLE」発行費用	104,130
サロン仏友会会費	195,000	サロン仏友会費用	192,356
		大学語劇お祝い金	30,000
寄付金	1,000		
		ゆうちょ銀行振替手数料	11,327
通常貯金利息	5	雑費	304
合計	1,554,996	合計	675,136
次年度繰越金（＊2）	879,860		

		2019 年 3 月 31 日	2020 年 3 月 31 日
（1）	ゆうちょ銀行通常預金	613,040	803,045
（2）	ゆうちょ銀行受払い口座	232,535	38,208
（3）	手持ち現金	30,416	38,607
	合計	875,991 (*1)	879,860 (*2)

【注】上記報告書は、予定していた 4 月 26 日の仏友会総会が延期となったため（案）として掲載するもので、3 月中に通信費の振り込みがない限りこの内容で、秋の総会（兼サロン仏友会）においてご承認をいただく予定です。なお、内部監査については 4 月初旬に行うことにしています。よろしくご了承ください。

フランス語劇を鑑賞して（1 面より続く）

映画ではジョージ・チャキリスらが演じていた、お祭りで街にやってきた（本来男性であるはずの）2 人組をかわいらしい女子学生が演じていました。後で伺ったところによれば、現在のフランス語科の学生は、女子が大半を占めているとのことで、私たちが在学していた頃とは隔世の感を持ちました。

私たちの後輩である現在の学生たちが、逞しく、優れた水準に成長しているということに触れ、嬉しくも誇らしくも感じました。来年以降も引き続き語劇を鑑賞に来たいとの思いを強くしたと同時に、仏友会の皆様にも是非鑑賞に来ていただきたいと思いました。

あっという間の 50 年、外語と私

西　敏彦（1971/ 昭 46）

来年、卒業 50 年の外語会・慶祝組となる。今、外大生活を振り返ると、ワンダーフォーゲル部活動にのめり込み、1 年間に 100 日以上の山登り、2 学年秋から紛争による 1 年間の学校閉鎖。まったくものにならなかったフランス語とともに、無理やり実社会に放り出された形だ。実社会・前半の 30 年間の新聞記者生活、後半 20 年間の大学教員生活、両方ともに、“ 落ちこぼれ ” にとっても外大卒の肩書は居心地良く、優秀な先輩諸氏にただただ感謝である。

93 年～ 97 年のパリ特派員時代は日々、異文化との格闘であり、驚きの連続だった。ミッテラン大統領からシラクへのバトンタッチ、核実験の再開、大相撲のパリ巡業、天皇皇后両陛下の来訪などの大ニュースの連続。一方で、新居探し、中三の娘の学校探しなど、プライベートも大忙しだった。お世話になった 16 区のジャン・ド・ラ・フォンテーヌ中・高校は、授業料はなく、学校保険料とカンティーヌ料金のみ。千葉県の公立中学校から転入した娘は、最初、チンプンカンプンだったが、3 年数か月後にはバカロレアに受かり、日本への帰国後、東大・文Ⅱに入学した。日本の大学入試には、仏での学期ごとの通知表の原本とその法定翻訳が求められるので、これからの方は、学校からの書類はことごとく保存しておく方がよさそうである。

4 年間のパリ特派員時代、山ほどインタビューしたが、印象に残っているのは『第三の大国・日本』の著者、ロベール・ギラン氏。第二次世界大戦の最中も日本で取材を続け、終戦後、また日本で取材を続けた。パリ郊外の 6 畳ほどの老人ホームの一室で、語り続けてくれた。歴史人口学者のエマニュエル・トッド氏は、パリ赴任前、東京でも何度か取材していたので、ふらりと職場に出かけても、にこにこと応じてくれた。ここ数年、著書が売れ続けているのはご存じの通り。ミッテラン大統領が死の直前に訪れたというカトリック哲学者のジャン・ギトン氏は美智子皇后（当時）と信仰に関するやり取りがあったことを語ってくれた。

今、年金暮らし。金をかけずに、仏・事情の最先端に食らいつきたい、と以下を活用しつつ日々格闘している。① NHK・BS2 のニュース、和訳付き放送、②それのインターネット版、同時字幕、さらに発言の仏語・原文付き、③ TV5 レベル別、理解度テストが無料､④ CNEWS､⑤ MEDIAPART､⑥ 24 時間ニュース専門ラジオの franceinfo、⑦ YouTube。

年二回の仏友会会報。≪パリ便り≫や≪ジュネーブ便り≫などの現地からの香りと後輩たちの息遣い、さらにコラム「昔日の青春 佛友會々報」から聞こえる明治、大正の諸先輩の声。熟読している。仏友会の発展に尽力された諸先生、しっかり屋台骨を支えている幹事の皆様に改めて、心よりの感謝である。

昔日の青春　**佛 友 會 々 報**

80 年のタイムカプセルを開ける　19

坂井英俊（1965/ 昭 40）

昭和 9 年刊。当時の諸先輩方の寄稿より抜粋してみよう。「巴里に居た頃」と題し諸氏の消息を伝えるのは大正 11 年卒・**平野重平氏**である。＜巴里の何か印象でも書いて呉れと頼まれてはみたものの少し永く居ると総てが平凡化されて特に思い出すこともない様な気がします。二、三日で巴里を「タキシー」か何かで駆け巡り、堀部安兵衛（ホリベルジェールを斯く呼べば直ぐに行きます）へ行け、玄武門へ（これは日本一の名優が「アルク・ド・トリオンフ」に与えた名前です）行けといふて過ごした方の印象の方が遥かに大なるものがある様です。ですから印象といふよりもむしろ諸先生並びに同級生の巴里での御動静でも書いてその責をまぬかれることにしませう。わたしの巴里滞在中に**増田先生**が御出でになりましたが餘り御勉強が過ぎ、留学期間満了前に御帰国なされるのを見て非常に残念でありました。大阪外語の**目黒先生**もご滞在中でしたが、ご健康の方も至極よろしく帰朝後直ちに**中目校長**の御令嬢とご結婚なされ「ラジオ」で名放送をなされて居ります。福岡高等学校教授だった**宮永先生**が滞在中御病気に罹られ、帰朝後お亡くなりになりました事はまことに残念な事で御座います。同級生中畏友**松尾君**は筆に口に大に奮闘され、かの日支事変のときは「ジュネーブ」で大に活躍されて居りました。**松尾君**の活動振りは諸君は既に読売新聞紙上で夙に御承知の事と存じます。朝日の**渡邉伸一郎君**が来て**羽左衛門氏**を案内して歩き回って居り、後その案内振りを朝日に書きましたが大変面白いものでした。放送局に居る**高橋邦太郎君**が印税成金で（私は知らないが何か新聞のゴシップ欄にありました）やって来て、あの「スマート」の風采で「シャンゼリゼイ」をのし歩いて居りました。＞

＜斯うして数へて見ると我々大正 11 年卒業生の中で巴里の地を踏んだ人は餘り多くはないが、それでも他のクラスの人々より比較的多い方ではないかとも考えられる。巴里でも時々年 1 回位佛友會をもよほしますが､たいてい十人位は出席します。非常に和やかな会合でいろいろ学校の思い出話で時が経つのを忘れる程でした。そのときより佛友會費の話も出てみんな一緒にして送らうなんぞ云ひ乍らつい伸ばして仕舞申し訳なき次第です。昔は今のクラフト紙（粗い紙）の chic な會報はなく校友會雑誌風な佛友會誌が発行されてゐたが、万般に亘って刷新をはかる予定の本年度は、ふたたびこの會誌を甦生せしめ、断片的な報告などにとどまってゐる會報より、一層飛躍することになった。會員の研究的な作物、狭隘なる會報にて満たされなかった種々なる感想、随筆、報告などを十二分に満載して、この我々の美しきつどひの視野を、全面的に展開させやうといふのである。＞

鍵山覚氏＜学校の先生をしている連中に云はせると酒飲んで騒ぐのは道徳上宜しくない事になるかもしれない。ただし英語部の教官がご光臨になると大騒して出席するのは就職上の御利益があるのだと云ふ説を唱へてゐる男があるが、ウソだらうと思ってゐる。他所の語部でも御常連ばかり、その前々年かの**片山教授**歓迎會の賑さとは比べるべくもなかった。ここでは英語部が圧倒的に多い。だが今はもう英語部・仏語部と区別する時ではないと思ふ。外語の名の下に一団となるべきである。満州では同窓會に欠席は珍しいと云ふ。同窓が一団となって働いてゐる証拠だ。誠に羨ましい気がする。わが校が日清戦役当時実用語学の必要を感じて設立されたことは云ふまでもない。が、時世は移っており創立当時とは事情を異にしてゐる。少なくとも英仏独語については通弁の教育をする必要がない。語学を利用して仕事をする人物を養成する時代になってきてゐると思ふ。各語部の會を急にと云っては難しからうが漸進的に、同総會に合併する様に希望してゐる。妄言多謝。＞なるほど昭和 10 年刊「佛友會會報」にも、現代のそれと同じく、青春の意気がこもっている。いつの時代にも若者は燃えていたのである。そしてこの翌年には、2・26 事件が勃発する。

玉川一郎氏＜筆を執るのはオコがましい次第ですが、センパイなんていはれると、クリーニングにださうとした服のポケットから五十銭ダマをみつけたときみたいにニヤニヤする性質なんで、つい書くやうなワケなんですが、さて職を変へること五度、やうやく蓄音機会社の宣伝部なんてところで、新聞広告を作ってゐる現在に落ち着いたのが昨年の一月、イヤハヤ何がなんだかワカランです。フランス語なんかぜんぜん使用に堪へんのですからね。親爺ゴマ化すためにうけてみたガイドの免状も張りつけてある、大正 15 年頃の写真を眺めて、「近頃は實にふとったもんじゃ」となげく対象となるばかり。フランスものの映画が来ると、出かけて行って、携帯していったオカミさんなり、或はその他のものに「ありゃあ、またあとで、と云ったのさなんて、スーパー・インポーズと張り合ってゐるのがせめてものフランス語をシットルと云ふ、シルシにならうかと云ふのが現在です。＞　＜次回へつづく＞